シキノイロ

華羅那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シキノイロ

【Ｎコード】
Ｎ３７８２Ｚ

【作者名】
華羅那

【あらすじ】
唯一の家族である兄を、数年前に奇怪な事件でなくした乙喜。事件の真相を知る機会を探し回る最中で、自らも奇怪な事件に巻き込まれ死んでしまう。このまま天国へ行くわけにはいかない乙喜がとった行動は……？

序章

人は死んだらどうなるのだろう。　再び人となるか、魂となるか、悪霊となるか、妖怪となるか、それとも……？

安易に人を信じたりはしなかった。
笑顔を振りまいてはいたが、本当に心から笑いかけた者など1人もいない。

芦川（あしかわ）　乙喜（いつき）。
7月14日生まれ、蟹座、17歳、B型。
彼氏なし。
友人なし。
家族なし。
兄弟なし。
一部の記憶もなし。
あるのは、作られた歪な作り笑いだけ。

実兄は奇怪な死に方をした。それ以来、見えるようになったのだ。
いるはずのないそれが。
見えてはいけないそれが。
乙喜に友達がいないのは、単に八方美人だからなわけではない。周りの人はみな、乙喜を不気味がって陰口を叩いた。
そう、乙喜はいわゆる『見える人』なのだ。

人間としてのオワリ　？

バシャッ！！

低い音をたてながら、乙喜の横を車が通っていった。薄汚い水溜まりの水をお見舞いされた。
気分は最悪。
傘も忘れた。

学校の昇降口の前で、どうすることも出来ずに、乙喜は立ち尽くしている。
他の生徒たちは、友人や恋人の傘に入れてもらったりしながら、帰っていく。

「芦川さん、傘ないの？」

「うん。　家に忘れちゃって……」

「うわ～大変！！　結構これから降りそうだけど、風邪ひかないようにね」

「うん。　……じゃあ明日ね」

「ばいば～い」

「……」

一緒に傘に入る友達なんていない。

遠くうしろのほうからは、陰口が聞こえる。

「いれてあげたら？」

「いや～悪い子じゃないかもしんないけどさ、一緒に傘に入って、あたしまで憑かれたら……ねぇ」

「それに今時、見えるとかイタイっしょ」

「たしかにね～」

やっぱり知られている。
高校生になってからは、見えても見えないようにしていた。
３階なのに窓の外に人がいたことも。
すれ違った人の肩に落ち武者がついていたことも。
こっくりさんをしている人の横に、本当にこっくりさんがいたことも。

全部黙っていたけれど、中学生の頃の話が、高校まで回ってきているようだ。

嫌な雨だ。

単に陰口を言われたからとか、そういうことで嫌に感じたわけではない。

思い出す。
同じように雨が降っていた日。兄が死んだことを。

人間としてのオワリ　？

蘇るえげつない光景を振り払うように、乙喜は走った。
鞄は腕に抱えたまま。

早く家に帰りたかった乙喜は、いつもは通らない細い路地に入った。

路地は薄暗く、じっとりとしている。隣にあるアパートの軒下にあるらしく、雨はあまり入って来ていない。
屋根から落ちてきた水滴で、たまに水溜まりが動くだけだ。

乙喜は足を止め、しばらくそれを見た。
やがて歩きだした。

しばらく歩くと、異変に気付いた。
動物が１匹もいないのだ。
こんな雨の日だ。蛙の１匹くらい居ても良さそうなのに。
不気味に思ったが、家まではあと少し。
足速に進む。

家の前の通りに抜けようとした時だった。

首根っこを掴まれ、路地に引き戻された。

「きゃあっ！！」

引き戻された勢いで、地面に放り投げられた。

「おい、コイツか？」

「ああ。間違いねぇ」

そこにいたのは、とても人とは呼べない、不気味な化け物だった。
皮膚は深い緑色をしていて、目玉は大きく開き、長く鋭い爪を持っている。

幽霊なんかはよく見てきたが、こういうのを見るのは初めてだった。
本気で身の危険を感じたのも初めてだ。
なんとか逃げようともがくが、足が思うように動かない。

「美味そうな人間だなぁ～。やっぱ女がいいよ。男の肉は硬くてよぉ～」

「阿保か。今回は普通に殺さなきゃ意味がないんだよ。俺らが喰ったらあっちへ行けなくなるんだぞ」

2匹の化け物は、しばらくコソコソと話合った後、再び乙喜のほうを向いた。
そして1匹が、ジリジリと乙喜との間合いを縮めてくる。

「……やだっ！！　」

力を振り絞って、地面の砂を掴んで投げたが、化け物は動じない。

「ちょっと苦しいけど、すぐ終わるからね～」

「あっ……！！」

首を掴まれ、締め上げられる。
身体は高く上げられていて、足が地面に着きそうにない。
首を締めている手を掴み、離そうと力をいれるが、少しも動かない。

「……お……にいちゃ……」

薄暗い路地の景色がだんだん霞んでいく。

やがて何も見えなくなった。

出逢い　？

「・・・・・・」

どれくらいたったのか。
乙喜は目を覚ました。

目の前には、綺麗な花畑が広がっている。
少し先には川があり、その畔（ほとり）には老婆が立っている。
どこかで聞いたことのあるような光景だ。

「もしかして私・・・・・・」

さっきのことが本当なら、自分は死んでしまったのだろうか。
幽霊を見たことはたくさんあるが、あんなふうに直接話しかけられたのも攻撃されたのも初めてだった。

一体、あいつらは何者なのだろうか。

乙喜がぼんやりと座っていると、川の畔の老婆が手を大きく振りながら乙喜を呼ぶ。

「そこの嬢ちゃんや！！　こっちに来なさいや～！！」

座っているだけでは何も分からない。
とりあえず乙喜は老婆の所へ行ってみた。

「あの～・・・・・・」

「おかしいの～。　どっかに落っことして来たんかの～」

呼ばれて老婆の所に来てはみたが、老婆はバインダーに挿(はさ)んである分厚い資料をバラバラとめくっている。老婆の所に来て、もう5分も経っている。

痺れを切らした乙喜は、一生懸命資料をあさっている老婆に声をかけた。

「私、呼ばれたから来たんですけど・・・・・・どうかされたんですか？」

「いや～それがのぉ・・・・・・これな、今日ここ三途の川に来る予定の名簿なんじゃが、嬢ちゃんの名前がどこを探しても載ってないんじゃよ～」

「はい？」

「まあ取り合えず、川を渡たりんさい。　渡ったらすぐに役員がいるから、そこで詳しく調べてもらいんさいな」

「待ってください！！　死ぬ予定がなかったんなら、生き返らせてください！！　まだ死にたくありません！！　死ぬわけにはいかないんです！！」

「そういうことはオラにはできねぇだ。　とりあえず川を渡りんしゃい」

「そんな・・・・・・」

「あと、これを着て行くだ」

そう言って老婆が手渡してきたのは、白い着物、いわゆる死に装束というものだった。
しぶしぶ乙喜は装束に着替え船に乗った。
すぐに老婆が、慣れた手つきで船を押しやった。船は真っ直ぐに川の向こう岸に向かっていく。辺りには濃い霧がかかっている。
老婆が見えなくなるのに、そう時間はかからなかった。

出逢い　？

5分くらいたったのだろうか。
霧の中に向こう岸が見えてきた。
先ほどの所とは違い、花畑はない。花どころか、草木の1つも生えていない広い荒野が広がっていた。

淀んだ風が吹きすさぶ荒野の中に、1人の男が立っている。
おそらくあれが、老婆の言っていた役人だろう。
軍服にも見える深緑の服を纏い真っ直ぐに立っている。
乙喜は船を降り、役人に近づいた。

「あの～・・・・・・」

「あ、はいはい。　名前と年齢教えてくれる？」

役人も、老婆と同じものらしき資料を持っている。

「芦川乙喜、17歳です」

「あしかわ～あしかわ～っと・・・・・・」

「川のお婆さんの所では、私の名前が載ってなかったんです」

役人もバラバラと資料をめくっている。
やがて最後までめくってしまった。

「あれ？　俺のも君の名前ないよ？」

「え？」

「ああ、大丈夫大丈夫。　こういうのたまにあるんだよね～。　ま、とりあえず上がって」

「上がるって・・・・・・どこに？」

上がるも何も、見渡す限り山さえもないこの荒野には今、役人と乙喜しかいない。
ほかに建物も何もない。
役人はしゃがみこみ、手を地面にあて、何やら唱えた。

「開け天の戸、王への門」

唱え終わった役人が地面から手を離すと、荒野一帯に地震とも思えるほどの揺れが起こった。
すると、乙喜の目の前に地面から土の塊が出てきた。
役人がコンコンとノックすると、土が剥がれ、扉が現れた。
２メートルほどの鉄の重たそうな扉だ。が、役人は軽く扉を押して開けた。
扉の先には、どこかへ登っていく階段があった。

「こういうのは上のミスだからさ、俺にはどうにも出来ないんだよね。　まあどちらにしろ閻魔様のとこには行かなきゃいけないから」

「えんまさま？」

「ほら、人間界でも聞かなかった？　死んだ人間は閻魔大王のもとで生前の所業を暴かれ、天国に行くか地獄に行くかを決められるやつ。　君をどうするかも最終的に決めるのは閻魔様だし、俺を通じていろいろするより直接話したほうが早いしさ。　とりあえず行ってみな」

「・・・・・・はあ」

（なんだかたらい回しにされてるような気がする・・・・・・）

正直面倒になってきたが、役人の言うとおり、直接閻魔大王とかいう人に話したほうがよさそうだ。
もしかしたら、自分を殺した奇妙な化け物たちのことも何か知っているかもしれない。
役人が、行け、と顎で階段をさした。
乙喜は足早に階段をのぼって行った。

出逢い　？

階段は、思ったほど長くはなかった。
すぐに木でできた扉が見えた。
一度だけ深く呼吸をし、扉を開けた。

「うわぁ・・・・・・！！」

赤塗の綺麗な、神社のような大きな建物が遠くに見える。
あの建物に向けて、同じ赤塗の鳥居が連なっている。
鳥居の下には、おそらく建物へ向かうのだろう、乙喜と同じ白装束を着ている人たちが並んでいる。
きっと閻魔大王はあの建物にいる。
乙喜も人の列に加わった。

しばらくすると、建物に近づいてきた。
さっきは鳥居の道の中にいたから見えなかったが、建物の前には大きな門があり、順番が回ってきた者が1人ずつ通されているようだ。
門には看板が掲げてあり、『閻魔王庁・分別窓口』と書いてある。

「分別？」

乙喜は、門の下にいる役人らしき人に聞いてみた。

「あの、すいません。　この看板の分別ってどういう意味なんですか？」

「天国行きか地獄行きかを、大王様に決めてもらうことが分別と言います」

「行先って、天国か地獄しかないんですか？　間違って死んじゃった人とかが、生き返るってことはないんですか？」

「まあ前例はないですね。　だいたい、ここから人間界につながる道はないですしね」

「もう生き返れないってことですか？」

「そうなりますね」

「そんな・・・・・私はまだ死にたくないです。　出口なら自分で探します！！」

「へ？」

乙喜は昔から、決断力だけはあった。
選んだ選択肢が正解なのか間違いなのか、深くは考えずに決断してきた。

どこかに出口がないか探してみると、あった。門の横に小さな井戸

が。
乙喜は見つけるやいなや、役人に捕まらないよう必死で走った。
「ちょっと君！！　そっちは・・・・・」
役人の言葉は、最後までは届かなかった。
乙喜は思い切って井戸に飛び込んだ。
役人は大慌てで、門に設置してある連絡器の方へ向かった。
「こちら分別窓口前！！　至急上へ取り次ぎお願いします！！　死者が1人妖ノ界（ようのかい）へ脱走しました！！」
「だそうです。　どうしますか大王様？」
連絡を受けた管理室の役人は、音声をそのまま閻魔大王へ流していた。
役人の真正面にあるモニターには、けだるそうに机に肘をつき座っている閻魔大王の姿があった。
とくに焦った様子はない。
「あそこの井戸は確か・・・・・・百喜屋の近くに通じておったか」

「はい」

「なら、あやつにわしから伝えておこう。　どうにかするじゃろう」

「了解いたしました」

そう言って役人は通信を切ると、自らの仕事に戻った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3782z/

シキノイロ

2011年12月18日10時52分発行